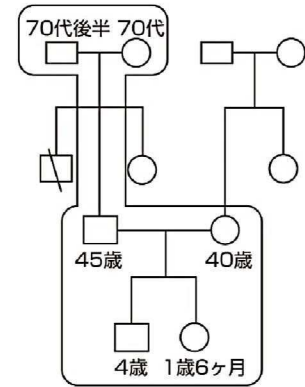


父親も虐待を受けて育ったケース

— 飲酒と暴言がトラブルの元 —

第2子の1歳6ヶ月児健診で言葉に遅れが見られたので保健師の家庭訪問を開始した。母親に訓練を紹介したが、生活が厳しいために途中でやめた。3歳児健診でも言葉の問題があり、児童相談所の言葉の相談でフォローしながら第2子の発達を支援していた。

父親は体格が大きく、お酒好きで飲酒すると乱暴になりトラブルを起こしていた。46歳の時に脳出血を発症し、リハビリによって歩行は回復したが就労はできていない。母親は療育手帳は持っていないが理解力が少し低い感じである。夜勤もある職場で働いているが、収入は月10万円程度である。祖父の年金収入が多いためにこの家族は福祉のサービスが利用できないが、父親と祖父の間には溝があり、祖父から金銭的な支援は受けていない。食事は祖母が主に作っている。



夏祭りの時に、第1子が父親の言うことを聞かなかったことがきっかけで父親と母親が口論になった。大量に飲酒した父親が母親を殴り子どもにも暴力をふるったので、警察を呼ぶ騒ぎが起きた。以前から家庭の中では母親への暴力や子どもへの暴力があり、相談に行こうと勧めたが母親は相談することを拒んでいた。

その夏祭りの時はですね、さすがにお母さんも、目が真っ黒になってあったので、その話を私が聞いて、その翌日に聞いて、すぐお母さんにお会いした時は、離婚したいという話も出たりしたんです。けど、そういう話をする中でもですね、毎日お父さんの送迎をしたり、それがさせられているところもあるかもしれないんですけども、そうばかりではないと周りに見えるような仲の良さっていうところがあって、まあ、離婚だけが解決ではないんだなというのを非常に感じているところです。

保健師が父親に「お母さんば殴ったでしょう？」と殴られるかなと思いながら言った。父親は「うん、殴った」と答えた。その経過について父親から話を聞く中で、「実は俺よりも、じいちゃんのほうが、俺たちに、どがんことばしてきたと思う？」という事実が出てきた。やっぱり話は当事者から聞かないとわからないなと感じた。父親の幼少時の経験が今の子育てに反映していると気がついた。父親は自分の親に比べたら自分がしていることはひどくないと言う気持ちを持っていた。しかし、これがエスカレートするとまずいので、児童相談所、民生委員、保育園、学校、こども課と一緒にしかかわる体制を作った。同居している父親の両親はキーパーソンにはならない。

父親の体が不自由になり就労できなくなってからは母親の収入だけで生活している。父親は障害者手帳2級で、障害年金の該当にならない。第2子の保育料が払えなくて滞納し、ボーナスで少しずつ精算している。2人を同時に保育園に通わせるお金がなかったので、第2子は第1子が小学校に入学した後に4歳から保育園に通園している。それまでは父親の両親が自宅で見っていた。第2子は言葉が遅れてい

ることや友達との距離感をうまくもてないなどの発達の問題があり、保育園とも連絡を取りつつ、父親と母親には小学校は手厚く支援を受けられる特別支援学級を勧めている。

第1子の学習の遅れや父親に対する態度などについて小学校と相談をしている。第1子は父親に対して文句を言う、それがきっかけになって父親が暴力を振るうことが多い。普通は叩かれたりするとおびえて話し方に注意をすると思うが、同じような言葉を父親に対して言う。第1子の発達のバランスの悪さがこの家庭のトラブルを増やしているのではないかと思うところもある。

私、どうしてもこのお父さんが憎めないところはですね、お父さんに、男の子の学力低下のこととか、ちょっと乱暴なことを少し話をしたらですね、お父さん、とても心配してはいらっしやるんですね。学校に、もうちょっと相談して、個別の支援とかしてもらったら、もっといいかもしれんですよって話をした時に「相談したい」って、お父さんが言われたんですよ。その時に、お母さんは「いや、上の子はよかです」って、「上の子は大丈夫」って言われて、あら意外な展開だったと思って。

父親は自分の飲酒がトラブルを引き起こしているという認識はない。「主治医（受診している脳外科）は酒を飲んでも良いと言っているから飲んでいる」と父親は言っている。飲酒していない時は良いが、飲酒している時には会いたくないという父親である。母親に脳外科の受診に付き添って行く時に主治医に飲酒について相談したかと聞くと「できない」という。父親は飲酒してトラブルを起こした時のことを覚えているが、アルコールが原因だとは認識していない。お酒がダメだと言うことを気づかせることが大事だと思うが大きな壁にぶち当たった感じである。

お酒を飲んだ時のことを詳細に覚えてあるんですよ。訳がわからなくなってやってるんじゃないというのが、一つ問題は問題かなって思うんですけど。やはり大きなトラブルになってる時は、お酒を必ず飲んでありますね。

家族がまず相談に、医療機関に相談に行って、そこから入るとというのがいいのかなという話もしてたんですけど、アルコールって最終、自分の、自分がそうなるのは何なのかとか、そこを断ち切らなければいけないという気持ちが出てこない、もうどうにもならないから。そこがですね、みんなは、断酒会を紹介したらいいとか、アルコールの病院を紹介したらいいじゃないですかって言われるけど、行っても、そう簡単なもんじゃないですね。

ケース会議をすると、訪問しているケースに虐待が疑われた時には、保健部門の保健師ではなく虐待担当の職員が行くべきだろうと言う話ができることもある。父親の暴力は問題ではあるが、父親自身も暴力を受けて育っている。父親が悪いというだけでなく、父親の気持ちも受けとめて支援することが必要だが、母子担当という業務からは外れてしまう。

どの家庭も虐待ケースは、たどっていくとそこなんですよ。やっぱり、お父さんがそういう経験してたり、お母さんが経験してるっていうの、必ずその壁にぶち当たって、その連鎖を断ち切るために、何が私たちでできるかっていうことで。まあ確かに、一時保護をしてもらって、児相の指導が入ったりすることで変わられるけど、根本的なものが、根本的なところで治してな

いから、原因となってるところで治してないから、そこだけを治そうとしてもですね、難しいな
ってというのがありますね。

感想：父親の飲酒は、精神業務の担当、子どもの発達は母子保健の担当、児童虐待は虐待の担当と業務分
担でかかわろうとするとケースの一面しか見えなくなる。ケースをまるごと、地域をまるごと支援す
る保健師の力が発揮できる新しいシステムが必要なケースである。このような多問題、複雑ケースが
増えてきている。

(小笹)